買春に性的欲求の充足を求めていると言える。このことは、筆者の援助交際女性に対する取材において、女性側への、「あなたを買う側の男性は、援助交際に何を求めているの？」というこちらの問いかけに対して、「身体」という答えが一番多いという現象に対応している。

しかしながら、ここで取り上げたアンケートの質問項目にも問題がある。この質問項目は、ある女性団体を基盤に結成されたグループが作成したものであり、買春男性の買春理由を、即物的・生理的な動機付けに還元する意図も読みとることが可能である。例えば、買春するときの買春男性の心理状態に関する質問項目や相手である売春女性をどう見ているかについての質問項目があれば、ある三十代男性の「女性をお金で買ったあとのむなしさ、でも、だれかに優しくされたいのです」[兼松　1990　p.309] といった愛情飢餓とも呼べるような言明が得られたとも考えられる。

4－4　援助交際と不倫の類型論比較

心理学者であるルーアン・リンキスト [Linquist　1987＝1998　pp.11-12] によれば、男女が不倫に走る理由として次の五つをあげている。①孤独からの逃避、②新鮮な興奮と刺激への願望、③愛情と心のつながりへの願望、④魅力の再確認への願望、⑤個人的な反逆心である。このリンキストの分類は、同じように社会的に許容されることが少ない性的なコミュニケーションである援助交際にも適応できると考えられる。

本稿で呈示した類型は、内面希求型「欠落系」、欲望肯定型「快楽系」、効率追求型「バイト系」の三つである。さらに欠落系は、AC系と魅力確認系の二つのサブカテゴリーが存在している。リンキストの挙げた男女が不倫に走る理由の五つの分類と比較してみよう。ただ断っておかねばならないのは、なぜ不倫を取り上げるのかという問題である。不倫と援助交際は、現代社会において社会的に許容されない、むしろ反社会的な行為とされる、性を前提としたコミュニケーションであることがその理由である。従って、不倫に関する類型論とここで呈示した援助交際の類型論との比較によって、より援助交際という現象自体特性が明瞭になるであろうという推測がある。

また言及しなければならないのは、不倫と援助交際の相違についてである。前回の論文で援助交際を、「ある人が金品を代償に、他者の性的な部分を自主的に売買することを前提として成立するコミュニケーションである」[圓田　1998　p.120] と定義したように、不倫という社会的行為を定義するならば、「不倫とは、妻子をもった男女が特定の他者との了解を前提に、その性愛自体を目的として二者間において継続的に成立するコミュニケーションである」と定義できる。この二つの定義から知ることができるように、援助交際も不倫も、他者の性的な何かを希求することを前提としているコミュニケーションであることがわかる。ただ違うのは金品と愛情の有無である。例えば三十代男性と継続的な援助交際を行ってきたサクライと名乗る23歳のOLは、援助交際と不倫の違いについて次のように話してくれた。

＜データ11＞
筆者：援助交際と不倫はぜんぜん違うって言ってたよね。どう違う？
サクライ：気持ちが入った時点で、不倫。
筆者：それって、「好き」という感情が入ったとき？
サクライ：うん。
（1998.3.20　収録）

では、この二つの類型の比較に移ってみよう。まず欠落系は、①孤独からの逃避、③愛情と心のつながりへの願望、④魅力の再確認への願望、⑤個人的な反逆心に当てはまると考えられる。つまり欠落系のサブカテゴリーであるAC系は、リンキストの①孤独からの逃避と③愛情と心のつながりへの願望に、魅力確認系は④魅力の再確認への願望に相当すると考えられる。AC系は、これまでの人生において家族や学校といった社会集団における対人関係によって、トラウマ（心的外傷）を抱えることになった人間である。そのため孤独や悲しみ、絶望からくる自己否定に陥っている人々である。それゆえに、愛情や他者からの肯定を求めている。⑤個人的な反逆心は、リンキストの場合、自分を裏切ったり大切に扱ってくれない夫や妻、恋人といった人たちに自己が傷つけられ